# 親子で読んで聴く　クラッシックギターの童話

## おはなし 4ー1　　ツバメののどはなぜ赤いの？　「エストレリータ 」

フーちゃん今日はお泊りに来ています。お母さんのお母さん、田舎のおばあちゃんが産まれたおうちです。
お父さん、お母さんとニャシチも一緒です。家の中に入ると、黒くて太い四角の柱があります。大黒柱っていうんですって。見上げると暗い天井。蜘蛛の巣の張っている、すすけた太い木がいっぱい。まるで工事中の建物みたい。暗くて高い天井の先にはワラみたいなものも見えます。お母さんに、ここは土間(どま)っていうんだよ、っておそわりました。家の中なのに床の部分は土を固めてでできています。
田舎のおばあちゃんは、今、老人施設にいます。おじいちゃんは私が生まれる前に死んでしまったので、このおうちは、今は使われていないのです。ときどき、この古いおうちのおそうじをしながらお泊まりするのです。夜は土間の隣の畳の部屋で寝ます。奥の部屋には亡くなったご先祖様たちの写真が何枚も壁に掛けられていて、じっと見られているようで何だか少し怖いです。このおうちは、いつもどこからかすき間風が入ってくるので、冬は寒いけど、今の季節は気持ちがいいです。お父さんとお母さんの間で暗い天井を見ながら横になっていると、その暗いところに吸いこまれそうな気がします。
お母さんが、「フーちゃん、桜の花が終わって田んぼに水が入って田んぼの苗が伸びて、外はぜんぶ緑色になったでしょう。そうするとね、ツバメが南から巣作りにやってくるのよ」とおしえてくれました。入り口の大きな引き戸の上や、土間の天井の梁(はり)にも古いツバメの巣があります。
「ツバメは、ノドのところが赤くてかわいいよね」とお父さんが言いました。
「なんでツバメののどは赤いの？」とフーちゃん。
ニャシチは太い柱に手をかけて伸びをしています。
「そうねえ、なんで赤いのかしらねえ？」とお母さんはしばらく天井を見ていましたが「じゃあ、こんなおはなしはどう？」と話し始めました。

ツバメは春になると、赤ちゃんを産んで育てるために仲間といっしょに北の町を目指します。そのときたよりになるのが『ツバメ星』と呼ばれるお星さまです。木に止まって葉っぱの間から夜空を見上げ、ツバメ星の位置を確認しながら北の町を目指すのです。ツバメたちは毎年、同じ時期の同じ夜に同じ星を見ながら飛び立ちます。ツバメたちはずっと昔からそうしてきました。でも最近、ツバメが頼りにしているお星さまは歳をとって少し目が悪くなってきました。ある夜ツバメは、空を見上げてお星さまに話しかけました。
「お星さま、今年もよろしくお願いします。きっと今年もかわいい子が育つと思います、だってこんなに空が透きとおってあなたのピカピカ光るお顔もよーく見えるのですから」
　ツバメは飛び立つのが待ち遠しいのでしょう。少しはしゃいでいます。お星さまは、目をシバシバさせながら「君はツバメ君だね、私は目もかすんできたが、今日は耳もよく聞こえないんだよ、メガネをかけるわけにもいかないし、歳をとるといろいろたいへんだよ」と言いました。ツバメたちの出発は一週間後の夜です。
　次の朝、渡り鳥仲間のカッコウがやってきました。
「ツバメ君おはよー、今日もいい天気だね、ぼくたちは明日出発するよ、君たちももうすぐだね、ぼくたちのお星さまはまだ若いからすごく張り切っていたよ」
　渡り鳥の種類によって、頼りにするお星さまが違うのです。カッコウはカッコウ星に導かれて移動するのです。カッコウは続けて言いました。「ところで質問なんだけど、ぼくはカッコウ、カッコウって鳴くだろう、だからカッコウなんだけど、ツバメ君、君はツバメ、ツバメって鳴かないのになんでツバメなんだい？　ツバメって鳴いてみてもいいんじゃないかい」

たしかにぼくは、ツピ、ツピ、ツピと鳴いてツバメ、ツバメとは鳴かない。なんでなんだろう。
ためしにツバメは「ツバメ、ツバメ」と鳴く練習をしてみましたが、口はまわらないし、喉はヒリヒリ。とても鳴けそうにありません。カッコウは「さあがんばって」と言いながら旅の準備があるのでしょう、忙しそうに帰って行きました。

ツバメは、大きな声で自分の名前を鳴けたら、きっと歳をとったお星さまにもよくわかってもらえるんじゃないかと思いました。そして出発の日まで必死に練習を続けました。一週間が経ちましたが、やっぱり思うようには鳴けませんでした。

出発の日の朝、起きてみるとあまりにも喉がヒリヒリと痛いので、ツバメは川に水を飲みに行きました。川面に映る自分の姿はぐったりとしていて目は真っ赤です。疲れた目で川の底をのぞき込むとキラキラ光るものがあります。見る角度によって白く光ったり、赤く光ったり、青く光ったり。七色に輝くきれいな石です。ツバメは思いました。あの石をくわえて飛べば、ぜったいにお星さまはぼくを見失うことはない。ツバメは思い切って川の中へ頭を突っ込み、目を見開きました。水は冷たく、思ったよりも深くて流れもあります。思わず目をつぶると、バランスを崩して体ごと川に落ちてしまいました。冷たい水の中でバタバタと暴れ、ほっぺたをプルプルとふるわせてもがきました。くちばしの先に「カチン」と何か当たりました。驚いて目を開け、口を大きく開けた瞬間、おもわずゴクン、と何かを飲み込んでしまいました。そして、飲み込んだ「カチン」と固いものはツバメの喉の奥の真ん中に引っかかって止まりました。

「ほら、そう、フーちゃんのここらへん」とお母さんが胸と喉のあたりを優しく触ります。
「ツバメは、お星さま飲んじゃったのかなぁ…… お母さんねえ、続き、続き」

夜になりました。いよいよ出発です。ツバメはお星さまのところに行きました。「お星さま、ごめんなさい、お星さまによく聞こえるように鳴き方を練習したんですが、だめでした。ぼくの声は聞こえますか？ ぼくの姿が見えますか？」

お星さまはこたえました。「私は君たちが鳴かなくても君たちのことがわかるんだよ。君たちがツバメと呼ばれるずっとずっと前からこの宇宙に生きているからね。だから大丈夫。さあ行こうか。それより、君のその喉元はどうしたんだい？ ずいぶんピカピカじゃないか、それなら遠くからでもよく見えそうだ」と言ってくれました。

ツバメは下を向いて自分の喉元を見てみると、夜空のいちばん大きな星のようにピカピカと真っ赤に輝いていました。「僕がのみ込んだ石は、お星さまのかけらだったんだ」とツバメは思いました。

ツバメはカッコウみたいに自分の名前で鳴ければ歳をとったお星さまにもわかってもらえるんじゃないかと、自分の名前で鳴く練習をしたことをお星さまに言いました。するとお星さまは、「君たちは仲間を呼ぶ時にジー、ジーと言うじゃないか。わしはもうジジィだから、ジージー。あれで充分だよ」と笑って言い、そして「さあ、出発の時間だよ」と、やさしく光りながらツバメをうながしました。ツバメは赤く光る喉を空に向け、仲間たちといっしょにいきおいよく夜空に飛び立ちました。

お話を聞き終わると、フーちゃんは眠ってしまいました。
夜空には無数のお星さまが光っています。田んぼからはカエルの鳴き声が聞こえてきます。
お父さんは眠れなくなったのでしょう。ギターを持ち出し、エストレリータ(小さな星)を弾き始めました。

作・池田由利子（ギター文化館館長）

**マヌエル・マリア・ポンセ(1882ー1948) メキシコの作曲家**
**エストレリータ(1913)　エストレリータは「小さな星」の意。若い女性が心に思う愛する人への切ない気持ちを夜空の星に向かって語りかける、という内容の愛の歌曲。**

YouTube 動画（演奏：ギタリスト/大萩康司さん）